

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：金沢市東山1-38-30・松魚亭

TEL <0762> 52-2271

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：大村精二 幹事：佃 一成

情報委員長：中村三次

1983・9月1日 第248号

ガバナー 説 示



国際ロータリー第261地区ガバナー

伊 東 清 雄 氏

公式訪問にあたり、4つのことについて話したい。

第1は、ロータリーの受けとめ方です。人生はめぐり逢いによって支えられているが、私はロータリーをめぐり逢いの場として受けとめています。ロータリーの綱領中にも、「奉仕の機会として広く知り合いを広めること」とあるが、この立派な組織を通じ、よき師、よき友とめぐり逢い、喜んでおります。

第2は、日本の世界に占める地位、日本の世界に対する責任と役割です。日本は資源がないが最も資源を必要とする大工業国です。従って世界の平和と秩序が保たれ、日本が世界から信頼され、国際社会で孤立しないことが必要です。そのために、外交、通商、安全保障等日本のなすべき使命と役割があるが、これを達成するには国家レベルの施策に民間サイドの裏打、推進が必要であり、世界組織であるロータリーが、その機会を与えてくれます。今ロータリーが取り組んでいるプログラム、「国際親善と世界平和への貢献」、を通じてこの面に協力することが出来ます。

第3は、今年度の会長 ウィリアム・Eスケルトン氏がそのテーマを「みんなにロータリーをみんなに奉仕を」と決められました。スケルトン氏は、ロータリーの総合的目標は、世界をもっと住みよい場所にするための力になることによって、世界理解と平和を拡大することである、とされています。ロータリーは、その地域の指導者の集りであり、世界平和の確立、理解と親善に大きな影響力を与えることが出来ます。その意味で各クラブの規模に応じ会員増強の目標を達成し、また奉仕活動はニーズに応じ、重点的効率的に取り組んでもらいたい。そして、今回、会長スケルトン氏が、これらの目標を達成した場合、感謝と御礼の意味で、会長賞をもうけておりますのでお伝えしておきます。

最後にまとめとして、人間の偉大さをはかる一つの尺度は、その人が同胞にどの位奉仕したかということです。我々ロータリアンは、ロータリーの目的を誇りとし、ロータリーが基盤とする原則に忠実に、創意を活かし、経験によって得た方法で、更に新しいアイデアを活用し、同胞に奉仕したい。この奉仕の累積総和によって人間の偉大さがはかれるものであり、奉仕の累積総和の向上をめざして奉仕活動に努めていただきたい。

—金沢北RCガバナー公式訪問講話より— (文責 中村三次)

私の職業奉仕

長谷川 塑人

私の職業は陶工であります。

朝から晩まで、土こねやら窯たきやら、又絵づけやらの生活ですが、仲々土は思う様にならず、窯も又然りです。窯たきは当然徹夜となりますが、現在は文明の利きとかで、プロパンガスや電気エネルギーを利用して1,200°~1,300°の熱を得るのですが、熱度が高ければ良いと言うものでもなく土に応じた丁度良い時が有って美しいので、時には以外だなあと想える程低い熱度で、美しい物が獲れる事もあります。

土を焼いて玉と化する言葉通り、焼物ですから焼くと言う行為の中で一つの型が誕生し、物言う存在となってくれます。決して作り手の想う様になり、思う様にならないのが窯であります。だから焼物屋は最後は火と言う処にどうしてもオマカセせねばなりませんので、性格的にも他の人々（工芸的職業）と違って来る様に想います。土の感触はよく女性の化粧材の中に入っている土分と一諸で、人間の肌に柔らかく気持の良いものです。時には茶っばいのやら、黒くざらざらしているのやら、又素肌の美しい輝くばかりの風のやらと、他種多彩の土が有ります。

石川県にも珠洲土や瓦土、小松地方では磁土風のもの、沢山有りますし、それぞれ個性的で硬い感じやら、又柔らかな物として作れる等、(使う時には、結構土の分子式等、知識的に勉強すると良い様です)面白い物です。

加飾の絵づけの方がこれ又一番難物です。人間は本能的に白いものに何か飾ると言う事を古来から行って来ましたが、焼物の場合も美しい型に美しい肌をもつ釉を掛けて焼けばそれで良いと言える！のですが、しかし言い切れない一面もあって、加飾の本能が働く様です。

加飾で余分なものをくっつけ、大失敗を良くします、一番想う様になると思っていた加飾行為が一番想う様にならない行為なのかも知れません。結極は全部想う様にならないと言うことでした。だからこそ、一生懸命仕事し、それを通じて生かしていただいている社会の皆様に、この職業を通じて奉仕させていただいていると信じております。



今週の花

吉山 宥海
(8月25日)

芙蓉



私の一年 (1)

交換留学生 飯野 晃子

“限界”

まだ少し肌寒い日の残るニューヨークをあとにしてからもうすぐ2ヵ月がたとうとしています。

私の1年間過ごしたのは、バッファロー市から車で約1時間半の所にある、ミドルポートという人口2千人位の村と、ガスポートという人口500人位の小さな村でした。ミドルポートロータリークラブには、この辺りの他の村から通ってくる人達を含めても、会員は18人しかいません。

私のホストファミリーは5軒あったのですが、最初の3週間過ごしたお家以外は、すべてロータリークラブに関係のない家族でした。

最後のおうちでは、お父さんが失業中で、パートタイムで、遊園地でホットドックを売っているの
でした。

2軒目のお家では、お休みの間は、朝から晩まで、想像を絶するような肉体労働、親類の家まで連れていかれて、広い庭のはきそうじをしなさい、と言われた事もありました。食事も、冷蔵庫をあけて勝手に食べなさい、といわれ、冷蔵庫をあけるとピーマンや人参のかけらしかはいっていか
かたりして、家から送ってもらった物を食べようとすると、怒られたりしました。このうちのお
母さんは子供を連れての2度目の再婚、お父さんは4度目の再婚という事もあって、お母さんは、
いつもヒステリー状態でした。自分と違う考え方を認めようとしないだけでなく、自分の子供を街
にも連れていかない、ぶどうさえも高いからといって、自分一人で食べるような人でした。シャワ
ーは5分、9時には寝ろといい、時には水道のもと栓をしめたりします。英語がわからなくて「今
の言葉がわからなかったから、すみませんが、もう一度言ってくださいますか」といったとたん、
「あなたはバカなの、アホなの、これ位わかるはずよ。」と言うのです。私はもう泣くことしかでき



ませんでした。毎日、つらくてたまりません。たたかれそうになった事もありました。洗たくかごを投げつけられたこともありま
した。そして、私の言う事は誰も信じてくれないばかりかやってもいない事をやっ
たと言われ、言ってもいない事を言ったと言われました。病気になっても信じてもらえず、ひ
っぱられて、学校へ行きました。これ以上はもうだめ、もうがまんできない、そう
言いつづけて、2ヵ月が過ぎました。もうその頃の私の精神状態は普通でなくなりか
けていました。そして、やっとホストファミリーをかわることができました。

この2ヵ月こそ、まさに自分の限界との戦いでした。今まで17年間、こんなにつらい思
いをしたのは、はじめてでした。ただ毎日生きていくことがこんなに大変だとは……。

アメリカ人への不信感と傷ついた心をかかえた私を快くひきうけてくださったのは、と
てもすばらしい人々でした。家をか変わった日から、本当の私の留学生活のはじまりです。

